

シンエツ80年の、 はじめの一步。

信越化学は2006年、
お陰さまで創立80周年を迎えました。
昨日より今日、今日より明日。
一步、また一步と歩んできた
はじめての一步の志を、私たちはこれからも
大切にしていきたいと思えます。



直江津工場石灰完成時 (1927年)



親不知鉱業所の全景

雪の中での探掘作業 (1945年頃)

——そこでもしよろしければ、
シンエツはじめての一步をすこし……。

長野県と新潟県の県境を流れる関川に懸かる苗名滝。落差五十五メートル、豪快な水音から、地震滝、とも呼ばれます。
一九〇六年、信濃電気株式会社がこの滝の水利権を獲得し、高沢発電所を建設しました。この電力会社の設立者が、後の当社の初代社長となる人物、越寿三郎です。
信濃電気はその後、当時最先端の肥料であった石灰窒素に着目し、事業化を計画。
高沢第二発電所を建設するとともに、日本窒素肥料株式会社（現・チッソ株式会社）との提携を進め、そして、一九二六年九月十六日、両社は、「信越窒素肥料株式会社」を発足させます。これが後の信越化学工業つまり当社の黎明でした。

信越窒素肥料の直江津工場（現・信越化学直江津工場）には、日本窒素肥料から現物出資された製造設備が設置され、また高沢第一・第二発電所からの電力によって一九二七年十月に工場が稼働します。
石灰窒素はシンエツを支える主力事業として、その後も長く会社を支えました。石灰窒素の原料である石灰石を採掘する親不知採石所は、一九三〇年に親不知出張所、一九五二年に親不知鉱業所と改称されて規模も拡大。一九七四年に鉱業所が廃止され

るまで、当社発展の土台として重要な役割を果たしました。飛騨山脈の北端、断崖の連なる新潟県親不知から産出される石灰石と、信州を貫くように走る豊かな関川の水が生み出した電気、この二つの地球の産物がシンエツの原点です。

ケイ素を利用したシリコンや半導体シリコン、塩を原料にした塩化ビニルなど、多岐にわたる素材を創り続ける今も、地球の資源を、人々の生活に寄与する価値に変える事業目的は変わりません。
信越化学のはじめての一步を、九十歳、百歳、その先もずっと、私たちは大切にしていきたいと考えています。



初代社長 越 寿三郎



現在の高沢発電所 (写真提供：東北電力株式会社)

当社のロゴの変遷

ロゴからも、広がり続ける当社の歩みを垣間見ることができます。



●ユキワ印 (1927年12月～)
信越窒素肥料が生産・販売した石灰窒素の商標です。信越地方のシンボル、雪の結晶がモチーフになっています。



●ヤマエス印 (1950年8月～)
赤色の「S」は当社の頭文字、三つの三角形は土質の良い三角州をイメージ。三角形が青いのは、作物が育ちにくい酸性土壌を中和するアルカリ性の石灰窒素の働きを表しています。また山が三つあるのは、長野市から望める妙高山、黒姫山、飯綱山の三山、また会社を支える株主、経営者、従業員を表すとも言われていました。



●ベンゼン核 (1967年10月～)
化学のシンボルである六角形をベースにしたデザインです。このマークの導入当初、当社は石油化学工業への進出を急速に進めていました。これは、多角化する信越グループを示すシンボルとして、また化学を基本に広範囲かつ高度な分野への発展を目指す当社の姿勢を表しています。



●現在のコーポレートシンボル (1988年10月～)
このコーポレートシンボルは、1986年12月に世界最大手のブランディング会社であるランドー・アソシエイツ社（本社：米国カリフォルニア州サンフランシスコ）とコンサルティング契約を結び、作成を依頼したものです。当社の国際的知名度の向上を図るとともに、あらゆる産業分野で使用できるよう、英文表記を基調とし、また、中央部には未来への広がりや新しい価値を創造する先端技術を表す光を描いています。